

【優秀賞】愛媛県教育委員会教育長賞

「父を守る」

愛媛大学教育学部附属中学校 3年 渡部 凜仁

わが家の寝室には、部屋いっぱい大きなベッドが二つ並んでいる。就寝時間が近づくと家族四人が集まってきて、それぞれ本を読んだり、音楽を聴いたり、その日の出来事などを話したりするが、時々プロレスごっこもする。その時はだいたい父が私の体に乗ってきて首や腹を絞めることからゴングが鳴る。今では父より体が大きくなった私も容赦しない。ふんわりクッションのきいたベッドはリングとなり大奮闘。でも最後はお互い笑い疲れて終了となる。父はあまり子どもを叱ることもなく、どちらかと言えば穏やかな性格だ。小さいころからの父とのプロレスごっこを通して、今まで父の愛情を体で感じながら大きくなってきたような気がする。

ある日、突然そんな父の様子がおかしくなった。ベッドの上で、体に力が入らなくなり、目はうつろで、額から汗をかき、苦しそうな表情になってきた。声を掛けても私の声がまともに聞けてない。今までこんな父を見たことがない。「何ごとが起きたのだろう」としばらく別の父を見ているようで、現実を受け入れることができなかった。母も父の症状に戸惑っているようだったが、すぐにいろんなところから情報を集め、てきぱきとこれからの対策を考えていた。母は看護師である。何もできない私は、いつも以上に母の存在が大きく見えた。

それから、母は父を連れて病院に行った。妹と二人、広いベッドの上でただただ父の無事を祈った。父が帰ってきた時、私は父の肩に触れるようにすぐそばで寝た。私が父にできる唯一のことだったように思う。しかし、父の反応はほとんどなく、ただじっとしたまま目を閉じていた。

それから、いろいろな病院で診察や検査をしてもらった結果、父の病気は精神

にかかわる病気であるということだった。この病気は若い人もかかる病気で、いろんな原因で十人に一人くらいがかかるらしい。動悸、息切れ、めまい、吐き気、冷や汗、手足の震えの症状があり、一番辛いのが、心の不安だという。それは、周囲の人には理解できない。私も父のつらさや苦しみを理解してあげることができない。

外見は健康そうに見えるが、症状が出始めると父はとても苦しそうな表情になる。私はなんとかして父の助けになりたいとスマホで病気のことを調べてみた。まずは正しい知識を得ることだ。その中に「寄り添う言葉」や「励ます言葉」をかけてあげると良いとあった。確かに本人が一番がんばっているのに、それ以上「がんばれ」はだめだろう。妹や母、祖父母にも協力してもらった。わが家の緊急事態を乗り越えるために「パパ応援プロジェクト」を作って、父の回復に向け、それぞれができることを考え、実行していった。

母は、父が会社に行く日も休む日も毎日愛情を込めたお弁当を作って元気づけた。そして、仕事もしながら、父の病院には必ず付き添って行った。肉体的にも精神的にも母が一番きつかったと思う。祖父母も家事などをするために時々やってきた。

父の頑張りとお応援プロジェクトのおかげか、父は仕事を一か月ほど休んだが、今は体調を考えながら、会社に行くことができている。精神疾患は外見では病気と分かりにくいのが、社長さんや会社の人たちの理解もあり、父も気兼ねなく仕事を続けることができている。

私は、今までに元気な中学生が突然不登校になった話を聞いたことがあった。元気なら学校へ行ったらいいのにと軽く思っていた。しかし、父がこの病気となり、心の病気で苦しんでいる人が世の中にはたくさんいることを知り、病気を外見だけで判断してはいけないということを知った。その中学生も本当は学校に来たかったのかもしれないと思うと胸が痛くなる。

私の周りにも、まだまだ人知れず心の病気で苦しんでいる人がたくさんいると思う。コロナやインフルエンザのように薬を飲めば治るというものでもない。心の病気は強い意思で治していかななくてはならない。病気が増えている今、お互いが幸せに生きるためには、病気のことを正しく理解し、周りとは協力し合わなければならないと痛感している。

私は最初、この作文で父の病気のことを書くことにためらいがあった。それはまだ心の病気というと体の病気に比べ、偏見があるような気がしていたからだ。こんなにも現代病になり、誰にでもかかりやすい病気なのに。

病気のことを書くにあたり父も「もっとみんなに病気について知ってもらったら心が軽くなっていい」と快くオーケーしてくれた。

わが家の寝室から、また四人のにぎやかな声が戻り始めた。父の体力はまだ前ほどではないが、プロレスで息ができないほど体を絞められる日を心待ちにしている。

これからも「応援プロジェクト」の輪を広げ、私は父を守り続ける。